

国語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本の話では、「花咲翁」^{はなさかじい}「こぶとり爺さん」^{じい}「舌切雀」^{すめ}など、老人が大いに活躍する。「桃太郎」の場合は、桃太郎が主役だが話のはじまりは「おじいさんとおばあさん」である。

昔話の語り手としては老人が多いのだから、ひよっとすると老人がよく登場する方が普通かも知れない。ヨーロッパの昔話はシュウチ^アのようにグリム兄弟の努力によって急に注目を浴びるようになるのだが、グリム兄弟の時代のロマン主義の影響を受け、若い男女の結婚の成就^aをもってハッピーエンドとする話が強調されすぎたのではないかと疑われる。それに昔話の「研究」ともなるとすべてヨーロッパからはじまったわけであるし、近代のヨーロッパの時代精神を反映して、昔話の本格的なものは、若い男女の結婚を主題としている、と考えられたのではなからうか。

若い男性がつぎつぎと難関を突破し、時には強い敵を殺しなどして、美しい女性と結婚する、というヨーロッパの典型的な昔話は、西洋近代に生じてきた、自我の確立の過程を非常にうまくシヨウチヨウ的^{あら}に表わしている。このような勇ましく強い男性像は、欧米における理想像であった。そして、今でもその傾向は相当に保持されていると言っていいたいだろう。

日本にはそのような昔話が実に少ないのに、「桃太郎」はそれに相当合致している点で、日本の昔話としてはむしろ特異である。五大お伽話^{ごたはな}（かちかち山、さるかに合戦、舌切雀、花咲翁、桃太郎）のなかで、これだけが「勇ましい男性」の物語であることにも、それが示されている。そんなわけで、日本が「X」を焦り「列強」に肩を並べるため「富国強兵」を重視した時代に、桃太郎はにわかに注目されることになった。私は御存知^{ごぞんじ}の「サイタサイタ サクラガサイタ」の国定国語教科書を小学一年生のときに習ったのだが、この「巻二」の最後に「桃太郎」の話があった。このときから教科書に色刷りのさし絵が載り、カッコキ^ウ的なことだったので、桃太郎のさし絵などを、今もよく記憶している。

西洋の昔話と比較すると、一番異なるのは、西洋であれば若い男女が結婚して幸福に暮らしました、となるところを、日本では桃太郎が宝物をもつて帰り、「おじいさんとおばあさん」が幸福になるところである。西洋的な英雄像に比肩^bしつつ、最後は若者の自立を願うのではなく、若者の孝行の話になるのだから、日本の軍閥が喜んだのも無理からぬことである。

^(注)
I、平成の現代、「おじいさんとおばあさん」が二人で住んでいるのは、ひよっとして、「桃太郎」の話が生まれてきた時代よりもヒンド^ヒが高いかも知れない。沢山の老夫婦が住んでいても、孝養^いをつくしてくれる「桃太郎」は、現在どのくらいいるのか考えてみるのも面白いだろう。もっとも、昔であつても「桃から生まれた桃太郎」などというのは、極めて特殊な例であつたと言える。

「桃太郎」の話の魅力のひとつは、桃から生まれてくる、というところである。昔話の英雄について異常誕生が語られるのは、世界中に共通と言っていいだろう。神話の世界では英雄ヘラクレスの場合のように、ギリシアの主神ゼウスと人間との間に生まれた子ども、という話もある。

このことは親の側から言うなれば、子どもはたとい自分の子であっても「サズ^サかった」のだという感覚に通じるものであろう。桃から子どもが生まれて来るように、子どもが生まれるということ自体が「Y」なのであり「恩寵^{おんちゆう}」なのである。

Ⅱ、すべての親は自分の子が「桃太郎」であることを期待している。つまり、自分の子は何らかの意味で「英雄」であれと願ったり、時にはそうであるべきだと思っていたり、ということになる。これは、人間すべての心の奥に、このような素晴らしい子ども像が存在しており、それをわが子に向かって投げかけるのだと考えられる。このような期待や願いがあつてこそ、子どもを育てられるのだと言えるが、そのような期待が子どもを押し潰^おし潰^おしてしまうこともある。

ここで、桃太郎が生まれてきた「桃」についても少し考えてみよう。『古事記』には、イザナギが死んだ妻のイザナミを黄泉^{よみ}の国に訪ね、イザナミの禁止を破つたために怒りを買ひ、逃げかえつてくる際に、この世と黄泉の国との境にある黄泉比良坂^{よみつひらさか}で桃の実を三つとつて投げると、追いかけてきた黄泉軍が退散してしまう、という話が語られている。桃はこのように古来から悪霊を防ぐ呪力があるものと認められていた。そこから桃の実には神霊が宿するという考えも導かれ、「花咲爺」の犬も桃から生まれたなどという話もある。こんなわけだから、桃太郎は「神の子」のように考えることもできる。

Ⅲ、桃太郎の類話のなかには次のような興味深いものがある（関敬吾編『日本昔話大成3』〔角川書店、一九七八年刊〕には「桃太郎」の類話が数多く記録されている）。徳島県三好郡^{みよじ}で採集された話に次のようなものがある。

「桃太郎は遊んでばかりいる。爺は桃太郎に仕事をしろという。桃太郎は山へ行くが、木や柴^{しば}の切り方を知らない。株になるような木を根元から引き抜いてかついで帰る。家に着き、木を家にたてかけると、家がつぶれて、爺はめしぞうげ（夏に飯を入れておく籠）に、婆は雑炊^カナベに首を突っ込んで死ぬ」

これはうっかり「神の子」など産むと大変なことになることを端的に示している、示唆に富む話である。香川県三豊郡^{みとよ}採集の話では、桃太郎は仲間と柴刈りに行くが昼寝をしている。大木を引き抜いて帰るが、大木なので家が倒れ爺さん婆さんは下敷きになって死ぬ。つまり、桃太郎は怪力なのだが、その力が災いのもとになり、鬼退治ではなく、おじいさん、おばあさんを殺してしまう。

こんな話を読むと、私などはすぐ最近の家庭内暴力の例をソウキ^キする。子どもはせっかく「神の子」として生まれてきたのに、親は人間のはからいで「よい子」に育てようとする。遊んばかりいる桃太郎に爺さんが仕事をしろ、というのとよく似ている。人間の浅^うはかなはからいで「よ

い子」にされてしまうと、神の子の力は破壊力としてしか作用しなくなる。家庭内暴力をふるう子どもの暴力は凄まじいが、それは残念ながら使い方や使い所を誤った強力なエネルギーや才能の顕われなのである。Ⅳ、人間は一人一人異なるので、すべての家庭内暴力がこのようだなどという気はない。しかし、暴力をふるっている子どもをこんなふうに見ると、その本質が了解されるときがある。

桃太郎の国定教科書的理解では「気はやさしくて力持ち」ということになっているが、類話を見ると、桃太郎は遊んばかりいるとか、皆が働いているのに「何もしない」でいる、というのが割にある。島根県隠岐郡の話では、「七つ八つのときに悪いことばかりする」。おじいさんおばあさんが叱ると、「考えがあつてやっているのだ」と桃太郎は言つて、鬼退治に行く話になる。こんなのを見ると、やはり「桃太郎」を育てるのが難しいことがよくわかる。Ⅴの豊かな子、センサイな子などは育てるのが難しいのだ。昔話には何気なく語られているようでも、意味深いことが多いものである。

桃太郎が鬼が島へ鬼退治に行くとき、それほど成人したという話がないままで家を出ていくような感じの話が多い。既に紹介したように「七つ八つのとき」などというのもある。類話のなかでの年齢の最高は十五歳である。やはり桃太郎はまるっきりの大人では感じが出ない。

「親指太郎」「一寸法師」などの話では、子どもが極端に小さいことが強調される。これらはすべて「子ども」のもつ威力が実は常識を超えたものであることを示している。これは実際に子どもを育てると実感されるが、幼い子どもでも「〜したい」とはっきりと意思を表明するときは、力づくでならともかく、なかなかそれをごまかしたり、変えさせたりできぬものである。大人の方が子どもの意思に負けてしまうことも多い。

もつとも、この話を自分の内界のこととして考えれば、自分の心のなかに生じてきた「小さい」あるいは「幼い」意思や希望も、実に大きい結果を生み出すことがある、という読み方もできる。誰しも自分の心のなかに「桃太郎」がいる。それをどのように成功させるかが課題である。

（河合隼雄『新装版 おはなしの知恵』による。問題作成の都合上、省略した箇所がある。）

（注）平成の現代——書籍は二〇一四年に出版された。

問1 二重傍線部ア〜クのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	シユウチ	1
イ	シヨウチヨウ	2
ウ	カツキ	3
エ	ヒンド	4
オ	サズかつた	5
カ	ナベ	6
キ	ソウキ	7
ク	センサイ	8

問2 傍線部a・bの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	成就	9
b	比肩	10

問3 波線部あゝうの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ 典型的

11

- ① 幅広く応用することが可能なさま
- ② 特性や本質をよく表しているさま
- ③ 新時代に変わるほどの事態が生じるさま
- ④ 自ら働きかけることをしないさま
- ⑤ 物事が成り立つときの根幹に関わるさま

い 孝養

12

- ① 考察を重ねて丁寧に掲うこと
- ② 財産をなして親孝行すること
- ③ 健康のために思い養生すること
- ④ 真心をこめてよく親を養うこと
- ⑤ 自らの知恵と勇気を振るうこと

う 浅はかなはからい

13

- ① 実現不可能な計画
- ② 軽率な行い
- ③ 愚かしい心づかい
- ④ 余計な思いやり
- ⑤ 無意味なやさしさ

問4 空欄 I ～ IV に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度選ばないこと。

I 14

II 15

III 16

IV 17

- ① もちろん
- ② ところで
- ③ むしろ
- ④ あるいは
- ⑤ ところが

問5 空欄 X ～ Z に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから一つ選べ。 X 18 Y 19 Z 20

X ① 一本化

② 社会化

③ 近代化

④ 国際化

⑤ 効率化

Y ① 希望

② 奇蹟 きせき

③ 驚愕 きょうがく

④ 成功

⑤ 偶然

Z ① 思いやり

② 表現

③ 理解力

④ 才能

⑤ 想像力

問6 傍線部A「日本の昔話としてはむしろ特異である」とあるが、どういうことか。その説明

として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

21

① 日本の昔話には若者が登場するものが少ないのに対し、「桃太郎」は、若者が主人公として活躍する物語である点で時代を先取りしているということ。

② 日本の昔話には動物が主人公のものが多数あるが、「桃太郎」は、勇ましく強い若者が主人公である西洋の物語に合致する点で珍しいということ。

③ 日本の昔話には老人が語り手として多く登場するのに対し、「桃太郎」は、勇ましい若者が戦う西洋近代の物語に合致する点に特性があるということ。

④ 日本の昔話には老人が活躍するものが多いのに対し、「桃太郎」は、勇敢な若者が活躍する西洋近代の物語に重なる点で異なっているということ。

⑤ 日本の昔話には老人が登場するものが多いが、「桃太郎」は強くたくましい若者が登場する点で、近代に入ってから日本で注目されたということ。

問7 傍線部B「日本の軍閥が喜んだのも無理からぬことである」とあるが、なぜこのように言

えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

22

① 老夫婦のために鬼退治をした桃太郎が、自立して一人で生きるよりも他者のために力を尽くす物語は、国民が一致団結して列強に並ぼうとした日本のあり方に適合したから。

② 鬼を退治して宝物を持ち帰る桃太郎が、一人で生きるのではなく自分の親に宝物をもたらしした物語は、豊かな国を築く方針を強調し、兵力の増強という側面を隠したから。

③ 強い敵を倒して勝利した桃太郎が、自我を確立した個人として生きるのではなく老夫婦を敬う物語は、上からの命令には絶対服従であるべき軍のあり方に都合がよかったから。

④ 鬼を退治して勝利した桃太郎が、自我をもつ人間として自立するとともに老夫婦の面倒を見て生きる物語は、富国強兵を重視した時代の日本の方針に合致するものだったから。

⑤ 困難に立ち向かって勝利した桃太郎が、自我をもつ個人として独立するのではなく親や目上の者に奉仕する物語は、富国強兵を重んじた国家的方針に一致するものだったから。

問8 傍線部C「『桃太郎』の話の魅力のひとつは、桃から生まれてくる、というところである」

とあるが、筆者は本文で「桃から生まれてくる」ことについてどのように述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 23

① 桃から子どもが生まれることはこの世でありえないことから、桃から生まれた桃太郎の話によって子どもは神の使いであることを表現している。

② 桃には古来、悪霊を防ぐとともに神霊が宿るとも言われたことで、桃から生まれた桃太郎は、人間を超越した神の子のようだという。

③ 西洋の神話の英雄が常識から外れた誕生のしかたで生まれたのと同様に、人ではなく桃から生まれた桃太郎も英雄としての神の子である。

④ 桃は古くから悪霊を防ぎ、神霊が宿る呪力があるとされてきたことで、桃から生まれた桃太郎は、人間を救う神のような存在だと考えられる。

⑤ 桃から生まれた桃太郎以外にも同じような話が存在しており、桃は悪霊から人をまもる力があり、かつ神霊が宿っているとみなされている。

問9 傍線部D「徳島県三好郡で採集された話に次のようなものがある」とあるが、筆者はこの

「話」によりどういうことを述べようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 24

① 子どもには生まれ持った性質や個性があるのに、親がそれを無視した育て方をしてしまうと、必ず子どもの側からの反発をまねき、激しい暴力につながってしまうということ。

② 子どもには各々持つて生まれた個性や能力があるが、子どもは自分自身を制御できずに常軌を逸してしまうこともあり、親への思いがけない仕打ちにつながるということ。

③ 並外れた身体や能力をそなえた子どもがその能力の使い方を誤ったことで、親に災難がふりかかってしまうこともあるので、特殊な子どもの育て方は非常に難しいということ。

④ 子どもには生まれ持った能力や素質があるのに、親の一方的な価値観による育て方によって、子どもの力が本来の筋道から外れて発揮されてしまい、不幸をまねくということ。

⑤ 生まれ持った特別な身体能力によって、桃太郎は思いがけず老夫婦に災いをもたらしてしまったが、桃太郎と同じような並外れた子どもは現実には存在しているということ。

問10 本文の内容に合致する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

25

- ① ヨーロッパの昔話に、若くて勇ましい男性が美しい女性と結婚する結末が多いという事実は、近代ロマン主義の影響を受けたグリム兄弟によって明らかにされた。
- ② 親は誰でも自分の子どもに「英雄」であってほしいと期待するが、これは親の心の中にある理想の自分自身のイメージを子どもに投影したものである。
- ③ 「桃太郎」には働かずに何もしないという類話もあり、こうした一般的ではない物語もふくめ、昔話は時に子どもや子育てについて考えさせられることが多い。
- ④ 「一寸法師」のように子どもが極端に小さいことが強調される昔話は、子どもがもつ力が並外れていることが表現されており、子どもを育てる大人の願望を反映している。
- ⑤ すべての大人の心の中に「桃太郎」としての自分が存在しており、その強力なエネルギーや能力をどのように発揮するべきかを考える必要がある。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

誰にとっても、いつの時代も自分の死は一度きりだ。死者が増加する多死社会は、個々人には直接的には関係ないし、多死社会だから終活に関心を持つ人が増えたわけではない。むしろ、これまでネガティブなイメージでとらえられてきた「死」を「終活」と言い換えたことで、多死社会をビジネスチャンスと考え、異業種参入で顧客カクトク競争が激化した企業が、「終活」ブームを牽引してきたといってもよいだろう。

Ⅰ 電鉄グループでは一九九七年に阪急阪神東宝グループの阪急メディアックスが葬儀会館を開設したのをⅩに、京急メモリアル、東武セレモニー、せいわライフサービス（東急）、グリーンサポート（南海）と、枚挙にいとまがない。

東京を代表するゲキジョウの一つとして知られる明治座も、都内の火葬場に隣接する葬儀会館を二〇〇三年に開設しているほか、生花業の日比谷花壇は二〇〇四年にオリジナル花祭壇など個人向け葬儀サービス事業を立ち上げ、二〇〇六年からは指定管理者として東京都青山葬儀所の管理運営をおこなっている。

ホテル業界でも、一九九五年に亡くなったホテルニューオータニ会長のお別れ会を契機として、超一流ホテルがこぞって一般家庭向けの偲ぶ会（お別れ会）を積極的に提案している。

生協（生活協同組合）やJA（農業協同組合）が葬祭業を始めたのは一九九〇年代だが、二〇〇〇年以降、一般企業の葬儀や墓の仲介サービスへの参入が目立つ。二〇〇九年に参入した流通業大手のイオンも、その一つだ。全国一律料金で葬儀をオンラインで仲介するネット系の会社も登場している。

お墓についても、民間霊園が次々と都市郊外に大規模霊園を開発してきたほか、散骨サービスに参入する業者、遺骨をアクセサリなどに加工したり、あるいは自宅安置のための容器をハンバイする業者も増えている。

葬祭業者や霊園業者は以前から葬儀会館や墓地の見学会、事前相談会などを積極的に開催し、顧客の取り込みを図ってきた。ここ数年、葬儀や墓地だけでなく、相続や遺言、介護など、終末期以降にかかわる異業種を一堂に出展させた市民向けフェアがあちこちで開催されている。エンディングノートや専門情報誌が次々に出版されているほか、任意後見契約や遺言作成にかかわる司法書士や行政書士も盛んに終活セミナーを開催している。葬祭業者と提携し、複数の霊園や散骨を一日で回れるバスツアーを企画する旅行社もある。

「終活」の名の下に、Ⅱをビジネスチャンスととらえるさまざまな企業が積極的に市場に参入したり、営業したりできるようになったことは大きい。Ⅱ、人の死やエンディングにかかわる企業が、これまでの「待ちの営業」から「攻めの営業」へと転換したのである。ここ数年の動きは、消費者の終活ニーズや関心が高まっているというよりは、葬儀や墓を核として、このほ

かにシンタ^エク銀行、介護サービス事業者、遺品整理業者、法律専門家、資格ビジネスなど、さまざまな業種の事業者が、堂々と宣伝できるようになったといったほうが実態をとらえているだろう。

そもそも元気なうちから死について考えようという傾向が出てきたのは一九九〇年代以降のこととで、ここ数年で始まったことではない。それまでは、死んだ後のことは遺族が考えるべきであつて、死んでいく本人が考えるという発想はほとんどなかった。この背景には何があるのだろうか。どんな人も自立できなくなったら、誰かの手を借りなければならぬが、これまでは、人生の終末期から死後までの手続きや作業は家族や子孫が担うべきとされてきた。しかし家族のかたちや住まい方が^{□Z}し、家族や子孫だけでは担えない状況が生まれている。

厚労省の「国民生活基礎調査」によれば、六五歳以上がいる世帯のうち三世代世帯が占める割合は一九八〇年には五〇・一％あつたが、二〇一五年には二一・二％にまで減少している。代わつて昨今では、夫婦二人暮らしか、ひとり暮らしの高齢者が半数を超え、高齢者の核家族化が進んでいる。ちなみに国立社会保障・人口問題研究所の二〇一四年ス^オイ^ウケイによると、二〇三五年には東京では、世帯主が六五歳以上の世帯のうち、四四・〇％がひとり暮らしとなるといふ。

ひとり暮らし高齢者が増加する背景の一つには、離別、死別や未婚など配偶者がいない人の増加がある。五〇歳時点で一度も結婚経験がない人の割合を示す生涯未婚率は、二〇一五年には男性は二三・四％、女性は一四・一％だった。一九九〇年以降、男性の生涯未婚率が急増している。一九九〇年に五〇歳だった人は、二〇一五年に七五歳になった。数年前から、未婚男性が続々と七五歳以上の後期高齢者の仲間入りを始めている。

^{□Ⅲ}、五〇歳以上で離婚する人も一九九〇年以降、急増している。特に一九九〇年から二〇〇〇年までの増加率は三〇・〇％近くもあり、熟年離婚の増加はこの二〇年間の傾向だ。

^{□C}夫婦二人暮らしか、ひとり暮らしの高齢者は、「別居する子どもに迷惑をかけたくない」、あるいは「頼れる家族がそもそもいない」という問題に直面している可能性が高い。

三世代同居があたりまえだった時代では、舅^{しゅう}姑^こや夫の介護に尽くした女性を表彰する制度も一般化していた。たとえば高知県では「長年にわたって老人の介護をし、そのケン^カシンのな行動が他の社会一般の模範となるような嫁を表彰し、これを讃^たえ日頃の^た勞^{らう}苦^くに報^はい^いるとともに、敬老に対する県民一般の認識を高める」という目的で、一九七〇年から一九八五年まで「模範嫁」表彰、一九八六年から一九九三年まで「優良介護家族」として表彰をしていた。

一九八四年には静岡県引^い佐^さ町（現浜松市）で「孝行嫁さん顕彰条例」がシ^キコウされたのをきっかけに、一九九八年までに三三三五自治体のうち九七七自治体で表彰制度があつた。「模範嫁」として表彰される条件は、「嫁」に限る、「外に働きに出ていないこと」「外部サービスを使っていないこと」である。現在でも多くの自治体で、介護をした家族を表彰する制度があるが、介護保険など「外部サービスを使っていないこと」が前提となっている。

Ⅳ 三世代同居が減少した二〇一五年には、配偶者のいる女性の五一・四%は働いている。そのようななかで老夫婦二人で、あるいはひとりで万が一のことに対応しなければならない状況になっている。

厚労省「国民生活基礎調査」(二〇一三年)によると、要支援または要介護と認定された人と同居している主な介護者のうち、男性で六九・〇%、女性で六八・五%が六〇歳以上だった。いわゆる「老老介護」である。介護が必要になっても、妻が介護してくれると思い込んでいる男性は多いが、実際には、妻が主な介護者である割合は、全体の一八%にすぎない。男性の死亡年齢が上がっていることもあって、介護が必要になるころには、妻も高齢になる。

妻が夫よりも先に要介護状態になることもある。しかし、夫に介護してもらおうとは考えていない女性は多い。私が二〇一四年に六〇代、七〇代の既婚者に調査したところ、病気で寝込んだ場合や介護が必要になった場合、夫が「頼りになる」と回答した女性は、男性に比べて少なかった。

こうしたことから、終活への関心の高まりは、自分らしい最期を考えたというよりは、家族のあり方が多様化したことによって、自分であらかじめ考え、ソナ^{ソナ}えておかねばならない時代になったことが大きい。

(小谷みどり『へひとり死』時代のお葬式とお墓』による)

問1 二重傍線部ア～クのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	カクトク	26
イ	ゲキジョウ	27
ウ	ハンバイ	28
エ	シンタク	29
オ	スイケイ	30
カ	ケンシン	31
キ	シコウ	32
ク	ソナエ	33

問2 傍線部a・bの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	後見	34
b	報いる	35

問3 波線部あ～うの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ	枚拳にいとまがない	① 次から次へと跡をたたない
		② 少しも途切れることがない
		③ 数えあげることができない
		④ まったく終わりが見えない
		⑤ 割って入ることができない

い	契機として	① 手がかりに
		② きっかけに
		③ 理由として
		④ よりどころに
		⑤ 参考として

う	ちなみに	① ついでに言えば
		② 予想してみると
		③ ひよつとすると
		④ 正しく述べると
		⑤ 詳しく説明すれば

問4 空欄 I 〽 IV に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度選ばないこと。

I 39 II 40 III 41 IV 42

- ① 一方 ② しかし ③ むしろ ④ たとえば ⑤ 言い換えれば

問5 空欄 X 〽 Z に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから一つ

選べ。 X 43 Y 44 Z 45

X ① 折返し ② 筆頭 ③ 掛け声 ④ 合図 ⑤ 皮切り

Y ① エンディングノート ② 多死社会 ③ 葬儀 ④ 終末医療 ⑤ 高齢者

Z ① 高齢化 ② 一元化 ③ 多様化 ④ 孤立化 ⑤ 減少化

問6 傍線部 A 「『死』を『終活』と言い換えたこと」とあるが、ここでの「終活」とは何か。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 46

- ① 自分の死を恐れずに受け止め、残りの人生を充実させること。
② 人の死にかかわる事業として、積極的に営業し利益を求めること。
③ 自分の死にかかわる物事を、自ら積極的に考えて決めていくこと。
④ 自らの人生を振り返ることで、死とは何かを学ぼうとすること。
⑤ 自分の死後に行われるはずの葬祭の儀式を、自ら生前に行うこと。

問7 傍線部 B 「〽待ちの営業」から〽攻めの営業へと転換した」とあるが、どういうことか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 47

- ① 死や終末期にかかわる多くの企業は、人々の関心の高まりを待ち続け、ようやく表立つて堂々と営業できるようになったということ。
② 死や終末期にかかわる多くの企業が、人が亡くなってからでなく、終活する人に積極的に宣伝し、営業するようになったということ。
③ 多くの企業が死や終末期に携わって競合したことで、依頼を待つことなく、我先にと積極的に宣伝し、営業し始めたということ。
④ 死や終末期にかかわる企業の多くは、世間に遠慮して営業していたが、今は終活する人に宣伝し、営業するようになったということ。
⑤ 多くの企業が、死や終末期にかかわる物事にいち早くビジネスチャンスを見出し^{いだ}て堂々と宣伝し、世間の人々を刺激したということ。

問8 傍線部C「夫婦二人暮らしか、ひとり暮らしの高齢者は、『別居する子どもに迷惑をかけたくない』、あるいは『頼れる家族がそもそもいない』という問題に直面している可能性が高い」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

48

- ① 高齢者の終末期や死にかかわる物事は、かつて家族や子孫が担ったが、今や家族形態や住まい方が変化し、終末期のあり方や考えも変わったから。
- ② かつて高齢者は自分の死後にかかわる物事は家族に任せたが、今は高齢者の孤立が進んだことで、家族とのつながりを望まない高齢者が増えているから。
- ③ 高齢者は、かつては三世代同居によって自らの生活を支えていたが、今は子ども世帯とは別居し、自分の生活費は自分でまかなう必要があるから。
- ④ 高齢者が終末期をいかに生きるかという問題は、かつては家族に委ねられたが、今は個人を尊重する時代となり、自ら決めるものとなったから。
- ⑤ かつて高齢者の終末期の介護は家族からの支えが必要だったが、今は家族や住居のあり方が変化し、家族間の信頼関係までも失われているから。

問9 傍線部D「一九九八年までに三三三五自治体のうち九七七自治体で表彰制度があった」とあるが、これによりどういうことを述べようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

49

- ① 多くの女性が夫の両親の介護に力を尽くしたことによって、かつては三世代同居が当然だったということ。
- ② 三世代同居があたりまえだった時代は、一般の女性は夫の両親への手厚い介護を競い合っていたということ。
- ③ 夫の両親を介護した女性を表彰する制度が一般化されたことで、敬老に対する国民の認識を高めたということ。
- ④ 夫の両親を介護した女性を表彰する制度は、かつては一般的だったが、現在ではすたれているということ。
- ⑤ 三世代同居が当然だった時代は、夫の両親を介護した女性が尊ばれるあり方が一般に広まっていたということ。

問10

本文全体は内容と論の展開のしかたによって、大きく三つに分けることができる。その場合の本文の内容と構成の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

50

① 最初に企業による終活ブームに対して人々は前向きとは言えないことを指摘し、次に日本全体としての高齢者世帯の増加を説明し、最後に社会の高齢化が進んだことで終活の必要性が生じたと結論づけている。

② 最初に終活への高い関心が多く企業の向けられている現状を述べ、次に一般的だった三世代同居が現在は少数であることを説明し、最後に終活への関心は家族のかたちの多様化によって高まったと結論づけている。

③ 最初に終活の活発な様子によって現代日本が多死社会であることを指摘し、次に今は独居や夫婦だけの世帯が増加していることを説明し、最後に多死社会への不安から終活への関心が世間に広がったと結論づけている。

④ 最初に終活ブームは企業主導であって人々の積極的な関心の現れではないと指摘し、次に日本の世帯状況や暮らし方の変化を説明し、最後に終活は家族のかたちの多様化からやむなく必要となったと結論づけている。

⑤ 最初に終活という語に乗じて活発化する多くの企業の動きを紹介し、次に日本の世帯状況や暮らし方の変化を説明し、最後に終活は家族のあり方の多様化とともに様々なかたちで行われるようになったと結論づけている。

(国語の問題は終わり)